死亡フラグ解体真書

シジミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死亡フラグ解体真書

【Ｎコード】
Ｎ７４４４Ｋ

【作者名】
シジミ

【あらすじ】
何が起こるかわからないこの世の中。　死にたくなければ、知っておきましょ不思議な呪文。
立てますか？　死亡フラグ。

俺、この戦争が終わったら結婚するんだ

本文

・俺、この戦争が終わったら結婚するんだ。

【おれ、このせんそうがおわったらけっこんするんだ】

使用者

・自国に婚約者、許婚、又はそれ等に準ずる人を残して戦争へと出兵する者が使う。

使用する状況

・前述のとおり、自国に婚約者、許婚、又はそれ等に準ずる人を残して戦争へと出兵する際に用いる

使用後の症状

・使用者が死んだことによる物語への影響は薄い。

・ただし主人公などに戦争の理不尽さを教える機会となる確率は高い。

・おそらくキングオブ死亡フラグ

使用例

「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ」

炸裂する光、飛び交う発砲音、香る火薬、慣れた血の味。　いつ死ぬともわからないこの状況下で、俺の隣のいるこいつは、言った。

「なに言ってんだ、こんな時に。　大体、それがどうしたってんだ」

「深い意味はないさ。　ただ、戦友のお前に知っていて欲しかっただけなんだ」

……俺たち第2小隊は、進軍経路の哨戒任務の最中にあった。　しかし、突然の敵襲。　先日の敵基地強襲作戦にて大打撃を喰らった敵国は、だからこその奇襲に出たのかもしれない。

だが……

「そんなことはどうだっていい。　今は、どう生き残るかだ」

「つれないねぇ、せっかく自慢話をしてやろうと思ったってのに。　まぁ、聞いてくれよ。　その子の名前はーー」

こいつ、いつも自分勝手に話だしやがる。　少しは聞くこちらの身にもなって欲しいもんだ。

「静かにしろ。　敵に見つかるぞ」

幸いなことに、近くに小さめの洞窟があったからそこに二人で身を隠したが、混乱が支配しているこの戦場ではここも安全地帯にはなり得ない。

「ちょっとぐらい、いいじゃねぇか。　式場はな、丘のところの教か……ウッ！　ゴホッ、ゴホッ！」

「どうし……おい！　それは血か？　大丈夫か！」

「へっ……さっき、逃げ込む時にドジったらしいな……ゲホッ！

弾が貫通したっぽいし、もうダメかもしれん」

「おい、まさか、冗談だろ!?　弱音をはくなよ!　国に彼女を残してんだろ!　彼女がまってるんだろ!」

「ハァ……ハァ……、おまえに、頼みがある……」

「なんだ?　……なんでも言え」

「あの子に、伝言を……グフッ……。　ハァハァ、『愛してる』って」

「バカやろう!　そんなこと、自分で伝えろよ!」

「少し……疲れたな。　悪いけど、先に休ませてもらうぜ。　また後で起こして、く……れ……」

「……っ!　おい!　起きろ!　目を覚ませ!　起きろ!」

ここは俺に任せて、お前らは先に行け！

・ここは俺に任せて、お前らは先に行け！
【ここはおれにまかせて、おまえらはさきにいけ！】

使用者
・おもに和解した敵や、今まで主人公と仲が悪かった味方が使う。

使用する状況
・主人公が最後の敵へと向かう時に現れる、いわゆる中ボスを引き受けるパターンが最多。

使用後の症状
・敵には勝てるが、その時の戦いで死ぬ確率は高い。
・稀に生き残るが傷を負うのはさけれない。

使用例
「ここは僕に任せて、お前らは先に行け！」
「そんなことできるかバカやろう！　待ってろ、今助けに行くからな！」
「バカはお前だ。　あいつがつくってくれたチャンスを無駄にするな！　ほら行くぞ」

「ちくしょう！　待ってろ、必ず助けに来る。　それまで待っててくれ！」

ーーふむ、やっと行った、か。　まったく、あいつは手に負えない程にお人好しだ。　おまけに掛値なしに人を信用するなど、愚かの極みでしかない。

僕はあいつのようなお人好しは嫌いだ。

僕が今までお前たちにやってきたことを忘れたわけであるまいに。　そのうえ僕が本当に敵を足止めするかどうか、わからないというのにな。

……しっかし。　なんてことを言ってしまったんだろう。

見える範囲で既に百を越える兵士。　それが目前に迫っている。

そして、そんなことを考えているうちに、ほら。　囲まれる。

「武器を捨てろ！　今すぐ投降すれば命を保証しよう！」

うるさいな、静かにしてくれよ。

「聞こえないのか！　今すぐ武器を捨てろ！」

この状況じゃあいつ等の仲間だと思われているってことじゃないか。　僕はそんなことを認めてなんか、いない。

だがまぁ、ここで借りを返しておくのも悪くないかな……

「今から5秒数えーー」

「うるさい！」

「い、……はぁ？」

「これでも王国騎士団副団長だったんだ、お前等雑魚におくれはしない」

「それは投降しないということか？」

「貴様等に無駄口を叩く暇はあるのかな？」

「ふむ、君は勇気と無謀をはき違えているな。　まぁよかろう。

……　かかれぃ！」

僕には野望がある、こんなところでは死ねない。　まして、あのお人好しのための足止めなんて言語道断。

僕をこんなことに使うなんて……いや、自分で言ったんだっけか。

ともかく、

ーー僕はお人好しが嫌いだーー

ここは俺に任せて、お前らは先に行け！（後書き）

殺人犯と同じ部屋にいられるか！俺は自分の部屋に戻る！

・殺人犯と同じ部屋にいられるか！　俺は自分の部屋に戻る！
【さつじんはんとおなじへやにいられるか！　おれはじぶんのへやにもどる！】

使用者
・殺人が起こった際に疑心暗鬼になり、1人でいようとする者。

使用する状況
・外界と隔離された空間が主。
・大抵は長期休業のバカンスの最中である。

使用後の症状
・使用者はその後、自室で遺体の状態で発見される。
・訪問先で必ず殺人事件が起こる謎の名探偵に注意。

使用例

「おい、今なんて言った？」

「この中に、殺人犯がいるかもしれないな、と言ったが？」

人類初の試み。　宇宙ステーション移住化計画。
今回はその計画の試運転であり、その目的は、一般人の場合、宇宙での生活範囲の限界はどこまでか。　つまり、プロがいなくてもどこまで生活に支障が出ないか、ということ。

というのも、機械工業の進歩は凄まじく、今では生活の何もかもが機械だけで成り立たせることが出来るまでになった。

そのため、一般人の中から希望者の抽選で１５名の参加者が選ばれた。　かくいう、俺もこの抽選に、はれて選ばれ最高のきぶんだったのだがーー

まさかの殺人事件がおこったのだ。　そう、全てが管理されているはずのこの宇宙ステーションで。

事件は、試験入居開始からちょうど一週間後の今日。　宇宙へ直接繋がっている、停泊庫の監視カメラが映らなくなっていた。

トラブルが起こった場合でも、機械が全てを全自動でこなしてくれるのだが、物好きな奴もいる者で、参加者の一人がその現場を見に行った。

そこで、事は起こった。

その見に行った参加者が停泊庫で死んでいたのだ。

「やっていられんな。　私は自室にもどる。　殺人犯と一緒の部屋にいては神経がもたないんでね」

「おい、待てよ……って、行っちまったか」

参加者たちは５人でひとつの班を組織し、それぞれの班長が話し合った結果、事故に巻き込まれたか、殺されたか判らないこの状況で個人でいるのは危険だから一旦会議室に全員集めたのだ。

「班長の言うことは聞いて欲しいんだけどなぁー」

不幸にも（？）俺は班長に選ばれてしまったんだ。

「いや、ホント危険だからな。　何はともあれ皆で話し合いたいというのに、あの人はまったく。　連れ戻しに行かなくちゃ」

しかも、何故か3人の班長の中のリーダーまで勤めることになったとか……。

「みんな、聞いてくれ！　今からとりあえず少しの間自由時間を設けるが、必ず3人以上で行動してくれ。　何があるか分からないからな。　では、以上だ。　あと俺の班のメンバーは一度集まってくれ」

……うん、ちゃんとまとまって動いてるな、よしよし。

「集まったな。　悪いが自室に戻った彼を連れ戻したいから俺の他に二人手伝って欲しいんだ。　……うん、ありがとう。　では、行こうか」

はてさて、なんと言ったら部屋から出て来てくれるかなぁ。混乱してるだろうし。　……ふぅむ。

「ーちょー。ー班ちーー。班長！　着きましたよ！」

おぉ、いかんいかん。　考えごとしていたら気がつかなかった。　結局良いのが思い付かなかったが、しょうがない。　当たって砕けろだ。　インターホンをポチっとな。

「おーい。　出てきてくださーい。　あなたの意見も聞きたいんですー！　……返事くらいしてくださーい！」

なんだか様子がおかしいぞ！　不本意だがマスターキーを使うか！

「すみません！　勝手に入ります！」

ーーピピッ、マスターキーを認証しましたーー

「大丈夫でーーッ！」

「し、死んでる……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7444k/

死亡フラグ解体真書

2010年10月9日06時35分発行